みいけ主婦会

※原稿送り先＝大牟田市不知火町2丁目　三池炭鉱主婦会
※電話で知らせるとき＝市内3033・7140　炭鉱＝474・528
※責任者＝文教部長　下川秀子

学力テストを阻止

＝緑ガ丘主婦のたたかい＝

三川　永江美由紀

〝逝いて還らぬ教え児よ、私の手は血まみれだ。君を縊つたその綱の端を私ももつていた、しかも人の子の師の名において〟だからこそ、この誤りの上にたつて終戦後先生方の切なる願いから五十万の教師は、日教組を組織したときいています。文部省もつよく反省をし、民主教育をよびかけ国民の人間性・人格・個性を十分尊重すること、権威に盲従しない批判的精神と科学的水準をあげて合理的精神の発揮、民主主義を国民が育てるように呼びかけた。独裁主義を打ちやぶる方法はただ一つ、国民みんなが政治に賢明になることであり、主権在民なのだ、正しいものを正しいとの判断を自分で下すこと、教育が上からの権威で動かされてはならないし、時の政府が教育を支配することは大きな間違いである。それで日本の教育基本法ほど立派なものはどこの国にもない……とこれは故長田先生に教えていただいたことで忘れません。

それがさいきん大きく変えられつつある。勤評に端を発し、いままた全国一せいに学力テストをやろうとしています。私たちはたんに子供が学力を身につけるためとのみいえないこの問題を、なぜ悪るいか勉強しようと先生方に分会にきていただき、学習会をひらきましたが、学力テストが意図する内容のおそろしさにぞつとしました

朝早くからピケへ

問題の二十六日、私たちは心配でじつとしておられず、朝暗い中に横なぐりの雨の中を三中（第三中学校）へ各分会からつめかけたのです。

運動場に入ると、山本先生が「いま入りました」といわれる。それつとばかり正門に走りました。そのとき今田教育長と校長は校長室に、補助員と答案用紙は二つに分けられ、宿直室に入つていたのです。

朝の四時二十分、校長はコソ泥のようにしのびこもうとしましたが私たちはそれを見つけて「民主主義を口にされる校長、教育長なら私たちと合つて話合いに応じて下さい」と外から呼びかけました。

六時十分、責任者の山村先生が見え「待つていました」と抱きつかれたとき、私は泣き出してしまいました。

ところが七時二十分ごろ、機動隊がいま山次と三本橋派出所方面にきたとの情報がつたわると、母親の怒りはいよいよつのり、三池争議で私たちを踏みにじつた官憲がこんどは教育の場を荒すのか、絶対ゆるされないと、ついに「学力テスト反対、官憲の教育介入反対総決起大会」になりました。

雨風の中にズブぬれで懸命に前列でピケを張る先生、私はここで真の教育者の姿を見ました。

校門を一歩でも入つたなら、子供は危険だから下校させると山田PTA会長は憤激、緊迫した空気の中に、前列の先生を傷つけては子供たちは杖を失う。母の強さでこのピケを守ろうと私は決意しました。

民主主義の中で美しく育てたい

宿直室でも主婦だけの決起大会がひらかれ、ピケはますます厚くなります。分会からも、続々と心配して集まつてきました。

そのころになると常一番もスト突入で校門をくぐつてきた、三本線がいくつか見えます。先生の眼がまたうるんできました。

こうした中で、つい音をあげた教育長は八時二十分、交渉の結果テストはやれないと断念。スゴスゴと車に乗つて引き上げざるを得ませんでした。

だが私たちは、第一時間目の九時前にピケを解くのは危険だとみてそのままの態勢を主張しました。

八時四十五分、各校の情報が入つてきます。一中団交中、二中不明三中は平常授業、四中平常通りの授業中、五中団交を校長拒否。

さらに十一時の情報では、二中引上げる。四中、五中はまだ。十一時五十分、四中に警官が入る。つづいて十二時十分四中はついに中止、警官が門まで入つたと聞く。

三中の三三名の先生方、また荒尾市三九〇名の先生は真に教育者として勇敢に行動されたと私は考えます。

敏速な処理、子供の幸せのみを念頭に考えていられることです。生徒が動揺せず平然としていたのは平素の教育のみのりだと思いました。

第二組合の子供でさえ、白紙で出すことを主張したことは、親の考えがゆがんでいても、子供たちはちやんと本当のことを知つているのです。

私たち母親は、大事な子供を点採り虫にし、曲つた学力をつけさせたくはありません。まして反動池田内閣の荒木文教政策の道具に使つてもらいたくありません。

のびのびと自由に発言できる、民主主義の中で美しく育てたいものです。

私たちはこんどの闘いで勇敢に闘かわれた先生方への感謝を、こんどの共闘であらわしたいと思います。

平和記念像前で団結を誓いあつた大谷主婦会

戦争反対を誓う

長崎へ団結旅行（大谷）

【大谷分会発】十月二十二日、笹林公園では「政暴法粉砕、政転要求、学力テスト反対の九州拠点総決起大会」がひらかれましたが、この日大谷主婦会では、かねてから計画が組まれていた団結旅行を行ないました。

まず出発にあたつて全員広場に集まり、地域役員も参加して決起大会を行ない、まだ明けきれぬ大谷いつぱいにこだますように「がんばろう！」の声がひびいたあと、バス三台に分乗して長崎へ向いました。

午前十時ごろには大会参加の意志を表わすと同時に、大会の成功を祈つて〝炭ほる仲間〟〝がんばろう〟を合唱し、市内の見学に入りました。

原爆のあとをつぶさに見て回る中で、その戦争のつめあとの厳しさに胸を打たれるとともに、再び戦争のおこることのないよう全員祈念像の前で誓い、三組に分れて記念写真を撮りました。

それにつけても池田内閣の労働者にたいする全面的な攻撃が、軍国主義復活、戦争政策によつて、また原爆の張本人である米国との結びつきによつてますますひどくなつてくることを考え、ひとしお感慨新たなものがありました。

みんなたいへん疲れた様子でもあつたが、和気あいあいのうちに、長崎見学で団結の固さを示して無事帰着すると、全員マーケツト前の広場で今日の旅行のふんい気をさらにこんどの団結の力に示そうと誓い合い、団結がんばろうを声高らかに響かせて解散しました。

仮装・応援繰出す

四山で秋季団結大運動会

主婦会四山支部では十月二十三日午前九時から、四山グラウンドで秋季団結大運動会をひらきましたこの日は雨もようの天気でせつかくの運動会も中止になるのではなかろうかと危ぶまれましたが、堂々とした入場式で運動会の進行がはじめられました。

入場式のあと「民族独立行動隊」のうたに合せて準備体操にうつり各競技に入りました。

主婦会では運動会を前にして、とくに各地域分会にお願いして地域の協力を要請していましたので、各分会は地域分会の協力をえて、創意と趣向をこらした仮装、応援団が競い合い、ほとんど各分会が応援団が誕生してまさに応援合戦をくりひろげて、会場に明るい笑いをぶちまき、団結運動会にふさわしい明るいものとなりました。

大島分会が演じたダンスは見事な集団美で、会場の主婦はもちろん来賓の間でも絶賛をよび、とくにこのダンスは二十九日にひらかれる「大牟田婦人ページエント」に出演することになりました。

頭に玉をのせて走るスプンレースや、とくに拍手を浴びたのは「資本家叩き」という番組。これはハリボテの資本家をおき、主婦が手をたたいて目隠しした組合員をリードしてそこまで導き、青竹でハリボテの資本家を叩くというものだが、日頃差別と卑劣な切りくずしに怒つている組合員・主婦は、このときとばかりたたくので、しまいには青竹の方が割れ、ホウキでたたく場面さえみられ大爆笑をさそいました。

心配されていた天気も、運動会の進行につれて青空が見え絶好の運動会日和となりました。

和気あいあいで笑いのうずの中で進められる運動会にたいし参加されない第二組合員たちはうらやましそうに事務所から望遠鏡でのぞきみする始末でした。

また、リレーは各分会から組合員も参加し、大熱戦をくりひろげ、応援合戦も大いにはずんで午後四時すぎ終了しました。

（写真説明）
写真は四山主婦会の秋季団結大運動会で元気いつぱいに踊る主婦と応援団

▽みんなの科学△

かぜ流行の心配

政府無策の予防対策

寒さのおとずれとともにカゼをひく人がふえ、インフルエンザ流行も心配されています。ところでこの冬カゼもインフルエンザも政府がその気になつて防ごうと努力すれば、現代医学で十分食い止められるのです。これは一昨年から今年へかけて日本中をあらしまわつた小児マヒの大流行が政府の予防体制のひどい不備からおこつたのと同類です。この不備が国民のはげしい抗議でソ連から大量の生ワクチンをやつと輸入でき、このおかげでピンチを切りぬけたことは、カゼ問題解決の道を示しています。

損害は数百億円

カゼや大流行するインフルエンザは、小児マヒや日本脳炎などと同じようにウイルスという病原体が体内に入つてふえ害をあたえるのですが、日本の最近の統計では一人平均年に七回カゼを引く、といわれるほどカゼは病気の王様です。このために薬を買つたり医者にかかつたり、工場や仕事を休んだりする損害をあわせると日本全体での損害は数百億円になり、個人の出費としてもバカにならないものになります。それだけでなく、カゼがもとで余病をおこして死んだり、カゼはなおつてもこのために慢性病にかかつたりする人は年に十四、五万人もあり、考えようによつてはどの病気よりも恐ろしい病気といえます。

予防接種で追放も

ところで、カゼはかかつてしまうと特効薬がないので自然になおるまで待つだけですが、幸いに予防ワクチンが発明されて、流行前にこれを注射すれば、注射後三週間目から予防効果を現わします。カゼで一番恐ろしいインフルエンザでも注射しないと百人のうち三十人がかかるのに予防注射するとこれが五人にへる（国立予防衛生研究所細菌部調べ）という大きな効果があるのです。また、例年、カゼの流行がはじまるのは十月中ごろなので、このころまでに健康な勤労人口の三分の一程度に予防注射をすれば、インフルエンザの大流行はなくなります。ところが政府の出すカゼ研究費は年に二十五万円足らずの少額です。

政府予防をサボル

それに、毎年十月に勤労人口の三分の一に予防接種すればカゼ流行は防げるし、このために必要なワクチンもつくろうとすればできるのです。このための費用も自衛隊がアメリカから購入する次期ジエツト戦闘機F一〇四の五機分（へ三十億円）でよいのです。ところが現在の日本では、希望者だけでなく、その上有料接種です。しかも一般の接種は、流行がはじまつてから、はじめて流行地に予防ワクチンを送るという体制になつているため、ワクチン輸送に必要な時間と注射してから予防効果をあらわすまでに二週間はたつぷりかかるので、いまのような体制ではせつかくの注射も予防にはなんの効果もないことになるのです。ところで、このようなやり方がムダなやり方だということはカゼ研究者はもちろん厚生省の担当者もよく知つています。それなのに平気で予防がサボられているのです。

小児マヒの経験で

また、有料もおかしなことですワクチンの予防の効果は、ワクチンを接種した人だけでなく、人口の三分の一の人に注射すれば他の三分の二のしない人もこのために守られるのですから、注射をうけた人は、痛い思いをしてうけない人まで守つてやつているわけですから、うける人だけから料金を取るのもおかしな話しです。その上政府が今年用意している予防ワクチンはわずか十二万五千人分しかなく、業者が流行をあてこんで用意している量でも三百万から三百五十万人ぐらいだろう、といわれています。このようにストツクが少ないのは、その年につくつたワクチンは、その年のうちに使わないと効果がなくなるため、財政的に損のないようにうんとひかえ目につくられているためですが、カゼから国民がうける苦しみや損害からみれば、完全予防接種の費用など微々たるものです。これは三年ほど前に小児マヒ・ワクチンにとつていた政府の態度と全く同じです。わたしたちは、小児マヒの経験をいかしてカゼ撲滅のために努力すれば、完全に防ぐことができるのです。

▼時のことば▲

水爆積載機「B52」

ラザフォード米下院議員は十月二十六日「すべての米戦略空軍基地にあるB52爆撃機は二十五メガトンの核爆弾二個ずつを装備している」と言明し、極東の米軍当局もこれを確認した。B52はアメリカの長距離核爆撃機のうちでも水爆を主装備とする主力機。A型からH型まであり最大速度は千四百キロ、実用上昇限度は一万五千三百メートル、最大航続距離は一万ー一万三千キロ。米戦略空軍二千余機のうち約六百機がB52といわれている。在日米軍当局は「B52は日本にはいない」といっているがU2型スパイ機の前例もあり信用はできない。

【おことわり】この号は十月二十九日号との合併号とし六頁にしました。